



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2018.12) 平成30年度:47-48.

女性のがん検診受診に対する意識に与える要因

近藤 愛美, 納谷 榛夏, 萩原 愛香理

女性のがん検診受診に対する意識に与える要因

近藤愛美 納谷榛夏 萩原愛香理
(指導：伊藤俊弘)

緒言

日本人のがん検診受診率は、諸外国に比べて低いことが示されている¹⁾。性別による受診率では肺、胃及び大腸がん検診のいずれにおいても女性が低く、乳がんと子宮がん検診を併せても男性より低い²⁾。女性の受診率が低いのは、家事や子育て、介護等によりがん検診を受診する十分な時間がとれない等の理由が考えられるが、関連研究は少なく明らかなでない。

本研究は調査を通して女性のがん検診受診に与える要因を明らかにすることを目的とする。

方法

研究対象：調査対象は、本学及び附属病院に勤務する医療従事者を除く全職員と男性職員の配偶者またはパートナーの女性 318 名とした。

データ収集方法：対象部署の責任者を通して無記名自記式の質問紙を配布し、調査を実施した。調査期間は、平成 30 年 9 月 3 日～9 月 10 日とし、質問紙は部署内に回収箱を設置して留め置き法にて回収した。

調査内容：河内ら³⁾、柳堀ら⁴⁾および小森ら⁵⁾の論文を参考に以下の質問項目を設定した。

①対象者の基本属性（年齢、職業、婚姻状況、子供の有無、要介護者の有無）、②がん検診の受診状況、③受診動機、④未受診の理由、⑤がん検診に対する印象、⑥がん検診の継続受診者に対し検診を継続する理由、⑦がん検診を継続受診していない者に対し受診しない理由

データ分析方法：各変数間の関連性は χ^2 検定を用いて分析し、検診の項目毎にがん検診の受診意識に対する影響要因を検討した。統計解析は SPSS Ver. 22 を用いて行った。

倫理的配慮：調査は本大学の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：18048）。対象者には研究目的、方法、倫理的配慮、匿名性の保証、目的外使用はしないこと、回収箱への投函をもって本研究への同意とみなすことを説明した。

結果

質問紙は 175 名（女性 117 名、男性 58 名）から回収し（回収率 55.0%）、回答は全て有効であった（有効回答率 55.0%）。

1. 対象者のがん検診受診状況

男女共通の検診項目では男女間の受診率に有意差はなく、全体の受診率は全国平均（肺がん 46.2%、胃がん 40.9%、大腸がん 41.4%）¹⁾ よりも低値であったが、乳がんと子宮がんの受診率は全国平均（乳がん 36.9%、子宮がん 33.7%）¹⁾ より高値を示した（表 1）。

表 1 対象者のがん検診受診率

		女性 人(%)	男性 人(%)	男女計 人(%)
肺	受診者	29(24.8%)	13(22.4%)	42(24.0%)
	未受診者	86(73.5%)	42(72.4%)	128(73.1%)
	不明	2(1.7%)	3(5.2%)	5(2.9%)
胃	受診者	44(37.6%)	18(31.0%)	62(35.4%)
	未受診者	71(60.7%)	36(62.1%)	107(61.1%)
	不明	2(1.7%)	4(6.9%)	6(3.4%)
大腸	受診者	35(29.9%)	15(25.9%)	50(28.6%)
	未受診者	81(69.2%)	39(67.2%)	120(68.6%)
	不明	1(0.9%)	4(6.9%)	5(2.9%)
乳	受診者	89(76.1%)		
	未受診者	25(21.4%)		
	不明	3(2.6%)		
子宮	受診者	88(75.2%)		
	未受診者	24(20.5%)		
	不明	5(4.3%)		

2. 女性のがん検診未受診および受診理由

女性のがん検診に対し、未受診の理由または受診する理由の結果を表 2 に示す。未受診のその他の理由は、胃がんは「検査対象年齢ではない」「人間ドックを受診している」、乳がんは「検査対象年齢ではない」「まだ不必要」「症状なし」「なんとなく」「がんになってもしょうがない」「授乳のため」、子宮がんは「まだ不必要」「がんになってもしょうがない」「子宮がん検診は手軽に受診しづらい」等が示された。検診を受診している理由は、約半数が「早期発見のため」であった。受診率が高かった婦人科がんのその他の理由に「職場で健診がある」「送迎バスがある」などの記載がみられた。上記の全ての項目で男女間に有意差はみられなかった。

3. 各変数とがん検診受診状況の関連性

がん検診受診状況と基本属性の各変数の関連性を χ^2 検定で分析した結果、年齢階級と職業別に有意な関連がみられた（ $P<0.05$ ）。さらに女性の乳がん検診受診状況と年齢階級にも有意な関連を認め（ $P=0.010$ ）、20～30 歳代に対し 40 歳代以上では毎年受診していることが示された。その他、統計的には有意ではなかったが、胃がん、大腸がん、子宮がんも同様の傾向が示された。職業別では乳がん（ $P=0.004$ ）および子宮がん（ $P=0.016$ ）検診は、主婦、正規職員に比べてパート労働者が毎年受診する傾向がみられた。

表2 対象女性のがん検診未受診理由と受診理由

	未受診理由 人(%)		受診理由 人(%)	
肺	費用がかかる	27(31.4%)	早期発見のために	15(51.7%)
	受診方法がわからない	20(23.3%)	一度に複数健診可能	7(24.1%)
胃	費用がかかる	23(32.4%)	早期発見のために	24(52.2%)
	検査が苦痛、その他	17(23.9%)	気になる症状がある	9(19.6%)
大腸	費用がかかる	23(28.4%)	早期発見のために	19(48.7%)
	検査が苦痛	22(27.2%)	気になる症状がある	9(23.1%)
乳	その他	8(32.0%)	早期発見のために	49(53.3%)
	面倒	7(28.0%)	案内通知が届いた	38(41.8%)
子宮	面倒、検査が苦痛、その他	6(25.0%)	早期発見のために	49(53.3%)
	費用がかかる	5(20.8%)	案内通知が届いた	35(38.0%)

また、胃がん検診では小学生以下の子供を持つ女性に対し、中高生以上の子供のみをもつ女性が毎年受診する傾向がみられた ($P=0.088$)。婚姻状況、子供の年代、養育負担、介護負担の各変数とがん検診受診状況の間には有意な関連はみられなかった。

4. 各変数とがん検診未受診理由の関連

女性のがん検診未受診者に、その理由と各変数との関連について、 χ^2 検定ではいずれの項目も有意ではなかったが、クロス表では調整済み残差の絶対値が2を超える項目が存在した。大腸がんでは「検査が苦痛」の20～30歳代 (-2.2) と40歳以上 (2.2)、「自分ががんになると思わない」の独身 (2.2) と既婚 (-2.2)。肺がんでは「仕事が忙しい」の正規職員 (2.0)。「自分ががんになると思わない」の独身 (2.1) と既婚 (-2.1)。胃がんにおいても「自分ががんになると思わない」の独身 (2.0) と既婚 (-2.0)。子宮がんでは「その他」の子供に小学生以下がいる (-2.2)、中高生以上のみ (2.2) である。養育負担および介護負担と女性のがん検診未受診理由の間には有意な関連はみられなかった。

5. がん検診の印象

がん検診に対する印象は、肯定的と回答した者は161名 (92.0%) であったのに対し、否定的は6名 (3.4%)、どちらでもないは8名 (4.6%) であった。

考察

本研究結果は、一般のがん検診項目では従来よりも受診率が低いことが示された。この理由は、本研究のがん検診に関する質問が明瞭でなく、一般健康診断や人間ドックとがん検診を区別した者が多かったために、結果としてがん検診の受診率が低く表れたと考えられる。さらに、本調査では男性よりも女性の受診率が高かったが、この理由は明らかでなく先行研究の結果を参考に考察することは難しいため、調査項目の各変数と未受診者の理由との関連について、女性のがん検診受診状況やその関連要因の特徴について考察する。

1. 女性のがん検診受診傾向

がん検診の受診状況は、若年層よりも40歳代以上が毎年がん検診を受診する傾向がある。さ

らに、パート労働者や中高生以上の子供をもつ女性にも毎年受診する傾向がみられた。これらに共通するのは、いずれも年齢層が高いことである。即ち、自分の健康を意識し始める年代であり、小学生以下の育児の必要性が高い子どもがいないことが、自分自身の時間に余裕が生まれがん検診受診に繋がっていると考えられる。職業についても、パート労働者は40歳代以上が多いことも関係していると考えられる。さらに、正規職員と比較して就業時間が短いこともがん検診受診に繋がっていると考えられる。一方、女性のがん検診未受診者の理由では子供の年代、養育負担や介護負担との関連はみられなかった。育児や介護による時間の制限でがん検診を受診できないことよりも、「費用がかかる」「検査が苦痛」「面倒」等の理由が大きいと考えられる。がん検診に対して約9割が肯定的であり、多くの人ががん検診の重要性を認識しているにも関わらず行動に直結しないのは、がん検診の優先度が低いことが考えられる。また、未受診理由で「受診方法がわからない」は、20～30歳代に多かったことから、若年層はがん検診に対する知識が不十分なため、受診行動に繋がらないことが考えられた。

小森ら⁵⁾は、病院へアクセスする機会が多い女性は婦人がん検診受診率も高いことを示した。本研究の対象者の職場では、希望した女性職員に対しがん検診センターまでの無料送迎バスを提供するなど、受診しやすい環境であることが、婦人科がん検診の受診率を高くしていたと考えられる。

2. 看護への示唆

本研究結果は、一般成人のがん検診に対する受診率向上のための調査・研究に寄与することが期待される。

3. 研究の限界

対象者が特定の職場であったことおよび対象者数が十分確保できなかったことなどから、本研究結果を一般化することは難しい。今後は一般成人を対象に調査を進めていく必要がある。

謝辞：

本研究に参加していただいた対象者の方々に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 国立がん研究センターがん情報サービス、「がん検診受診率」, <https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/screening.html>
- 2) 厚生労働省, 「がん検診 愛する家族への贈りもの」 <http://www.gankenshin50.mhlw.go.jp/campaign_29/outline/low.html>
- 3) 河内亨介, 矢田昭子, 佐藤美紀子, 島根大学医学部紀要, 37, 67-72, 2016.
- 4) 柳堀朗子, 藤澤武彦, 石田ゆかり他, 調査研究ジャーナル2 (1), 34-8, 2013.
- 5) 小森栞, 見田真木子, 東京大学公共政策大学院, 事例研究「医療政策」2013年度冬学期期末レポート, 1-20, 2013.